

平成二十五年十月七日 (月)

文語の苑上架原稿の校正を擔當して數年となりぬ。時に大家の玉稿に妄校を施すの僭越を敢てし、恐縮の限りなり。

この間熟々惟みるに、現代口語體が文語との構造的乖離を加速しつつ、あるを感ず。一例を擧ぐるに、文語にては、先づ漢文訓み下し文の場合、時制を殆ど問題にせず、和文の場合、謂はゆる過去又は完了の助動詞豐富なるも、これら多くは時制といふより、むしろ感情を内包し、感嘆詞ともいふべきにて、この文語を基礎とする口語體は、論理優先を貫き、感情を排し、助動詞を大幅に省略す。而して時制はなほ主要の問題とはならず、口語體完成に與りて力のありたる森鷗外も「澀江抽齋」の冒頭にて

(前略) 定府の醫官で當時近習詰になつてゐた。しかし……信順の館に出仕することになつてゐた。父允成が致仕して、……父を失つてから四年になつてゐる。

三度目の妻岡西氏徳と……二男優善とが家族で、五人暮しである。主人が三十七、……二男が七つである。邸は神田辨慶橋にあつた。知行は三百石である。

と記し、「ゐた」と「ゐる」或いは「あつた」と「ある」とを同一時點の記述として併せ用ゐるは、極く普通なりき。然るに近時時制に嚴密の英文法に刺戟を受け、これを忠實に翻譯せむとするの風純國語口語文に滲透しつつ、あり。もしこの風をば文語に及ぼさむとして、助動詞の使用を助長せば、その意味さへ變ずるに至るべし。

文語に於ける敬語は亦文意を正確とするも、口語體への移行には問題多し。文語の「侍り」「候」などの丁寧語は用言の連用形に接続す。然るに口語體の丁寧語の場合、同じ用言にても、形容動詞はその語幹に「です」が接続し、動詞はその連用形に「ます」が接続す。獨り形容詞にはや、重き「御座います」以外の丁寧語の接続なきゆるゑ口語文法はその終止形に「です」の接続を薦め、今や定著せむとす。然れども未然形「美しいでせう」には自然の語感あるも、その他は連用形「美しいでした」は論外とするも、終止形の「美しいです」「美しかったです」にはなほ不自然を感ず。此處は、「美しい景色です(でした)」、「美しく輝いてゐます(ました)」などと形容の内容を具體化する語への「です」、「ます」の接続を工夫すべきに、安易に終止形への接続に固執して「美しい(しかった)のです」を提唱する向きあり。されど「の」を挿入せば意外、反省、氣付き等の意味加ふべければ、常には適用するを得ず。

形容動詞は使用頻度特にその連體形に高し。その語尾「たる」は文語、口語に共通するも、他方「なる」は、口語にて「な」一音となるため、文語にても重く感ぜらる。語幹に格助詞「の」を添ふるも一案にして、明治大正期の文語に用例多し。

この形容動詞日本語特有の品詞なれば英文法に馴染まぬ所あり。近頃、副詞は専ら假名書きにすべしとて、或る人「げんみつに」と假名表記す。英文法にては strictly を副詞とす。然れども國語の「嚴密に」は形容動詞連用形にして副詞に非ず。心すべきに非ずや。